



子どもにとって

「楽しい!」がもたらすもの

～ 「楽しい」と感じてほしい ～

校長 鈴木 和枝

学校では主に生活科や理科、自立活動といった学習の中で、栽培活動に取り組むことがあります。そしてこの時期は、朝の正門に向かおうとすると、植木鉢の前にしゃがんでいる登校したての2年生に呼び止められます。話題はもちろん野菜のこと。一人の子が自分のエダマメの実を見ながらじっと考え込んでいました。私に気が付くと「校長先生、これはもう収穫してもいいのかな?」と訊いてきました。どうやら収穫の時期を窺っている様子。ゆっくりと近づいて一緒にエダマメを見ながら「どうだろう…どう思う?」と尋ねると「う～ん、迷う…」と言いながら、若草色の瑞々しい実の中身を確認するように何度も何度も触っています。最終的に「ぷっくりしているからいいと思う!」と自分で決めました。「一つ、二つ…五人家族だから五つ…」と、もいだエダマメを大事そうに袋の中に入れました。とても楽しそうな収穫の時間でした。

さて、なぜかはわかりませんが、私は小さい頃からよく歌を歌っていたそうです。音楽が好きな子どもでした。ピアノが欲しくてたまらなかったのですが、家も狭くなかなか買ってはもらえず、家にピアノがある友達のことをとても羨ましいなと思っていました。親に頼みこんでオルガン教室には通わせてもらいました。ところが、全く先生のおっしゃることが理解できず、一向に上達しません。挙句の果てに「和枝ちゃんは合奏のときには弾く真似だけしててね」と先生がおっしゃる始末。先生もお手上げだったのだと思います。それでもやっぱりピアノが弾けるようになりたくて、オルガン教室の卒業のときに、多くの友達や大人の前で「私はこれからピアノをやりたいです」と話しました。周りの人がびっくりしたり、ちょっと笑っていたりした風景を今でも覚えています。「好き」なのだけれど、全くできなかった。

両親は半分あきれながらも、私があまりにせがむのでピアノの先生を探してくれました。念願のピアノレッスンが始まりました。一番最初のレッスンのときに、初めてピアノの鍵盤の上に指をのせました。「卵があると思ってその上に手をのせるように、手を丸くしてね。手首は下げないでね。それができたら好きな音の鍵盤を押してみてね。」と先生はおっしゃり、私は指で鍵盤を押してみました。そのときの音の響きは今でも忘れられません。その後、右手でほんとうに簡単な旋律を私が弾き、そこに先生が和声（和音の伴奏）を付けてくださいました。響きが一気に広がって、「なんてきれいで楽しいんだろう」と子ども心に思いました。

その後、私はピアノを買ってもらい、レッスンに通いましたが、何度も引越しをしたことでそのたびに先生を探さねばならず、ピアノには途切れ途切れの向かい方でした。しかしながら、幸いにも大人になってから出会った先生もたいへん素晴らしい方で、その先生からの「私は、(私のような人がいなくとも)和枝さんが自分自身で『どう弾いたらよいか』と考えて決めていける人、一生音楽を楽しめる人になってほしいと思っている」という言葉が深く心に残っています。先生は「勉強をし続けて自立し、音楽を楽しむようであってほしい」ということをおっしゃりたかったのだと思います。

「楽しい」という感情は、何をも凌駕する感情なのではないかと思います。そして、この感情は、次の三つの欲求が満たされたときに生まれるそうです。一つ目は、自律性（自分で選んでいる、自分の意思で行動している）、二つ目は有能感（自分にもできる、自分は成長しているという実感、もっとやりたいという内発的な動機につながる）、三つ目は関係性（周りの人が自分を理解してくれている、協力できる、自分はここにいてよいと思える挑戦や学びに向かう環境）だそうです。子どもたちの中の「楽しい!」という気持は、必ず「子ども主体」「子どもの本気」ということにつながるのだと思います。「楽しい!」を生む3つの欲求について考えながら、7月の教育活動を進めてまいります。

5年生の三浦での活動の一コマ。時間が経つのを忘れて没頭しました。



すべては子どもたちのために ～ 子どもが決めているか、成長していると実感しているか、挑戦しているか～